

【空気・飛沫を介して感染する感染症】

結核（二類）		・今なお年間1万5千人以上の患者が新たに登録されており、集団発生が学校、事業所、病院等で多発する傾向がある ・現在、死亡率のピークは高齢者である	
症状	・微熱、寝汗、2週間以上続くせきや痰が早期症状だが、症状も苦痛もなく、健康診断時のX線検査で診断される場合も多 ・菌が定着した場所で（髄膜、骨、関節、腎臓など）それぞれ特有の病変をおこす（圧倒的に多いのは肺結核）		
病原体	結核菌	感染源	結核患者のせきなどにより飛散する飛沫核を吸いこむことによって起こる
感染経路	① 飛沫核感染（エアゾール感染） ② 塵埃感染（じんあいかんせん）	予防対策	① 定期的健康診断 ② 予防接種・・・生後1歳未満の乳児にBCGワクチンを接種する ③ 患者管理・・・患者の、接客業など（理容・美容業含む）の従業を禁止 ④ 治療・・・特に感染させる恐れの高い者は、入院させ、治療を行う

ジフテリア（二類）		・予防接種の普及により、2000年以降発生はない	
症状	・ジフテリア毒素による咽頭炎を起こす	病原体	・ジフテリア菌
感染経路	・飛沫感染	予防対策	・トキソイドワクチンの予防接種が有効

重症急性呼吸器症候群（SARS）・中東呼吸器症候群（MERS）（二類）		・病原体はコロナウィルスに分類され、コウモリに由来する	
-------------------------------------	--	-----------------------------	--

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）		・子供や若者は比較的軽症が多いが、高齢者や持病がある人は重症化しやすく、死亡することもある ・急激な感染拡大に対し、社会経済活動が制限され、社会全体に大きな混乱をもたらした	
潜伏期	・1～14日で、発症の2日前から人に感染させる可能性があるため、患者の隔離で感染拡大を完全に止めることはできない	病原体	・新型コロナウイルス
症状	・発熱、せき、息切れ、喉の痛み、鼻水、鼻づまりなどの呼吸器症状	感染経路	・飛沫感染、飛沫で汚染された環境に触った手で、目、鼻、口を触ることによる接触感染
予防対策	・熱、乾燥、エタノールなどの消毒効果 ・①密閉空間 ②密集場所 ③密接場面 という3つの条件が該当すると感染拡大のリスクが高く、3つの『密』をつくらない ・mRNAワクチン		

鳥インフルエンザ（H5N1及びH7N9）（二類）		・インフルエンザには多くの種類があり、ヒトだけでなく他の動物も感染する	
症状	・致命率は極めて高く、肺炎が主な死因	感染経路	・かかっているニワトリなどと接触し、羽や粉末状になった糞を吸い込むなどして大量のウィルスがヒトの体内に入った場合、ごくまれに発病すると考えられている
感染源	・感染しているニワトリなど		
病原体	・鳥インフルエンザウィルス		

インフルエンザ（五類） （鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）		・毎年多くの患者が発生し、大きな流行を起こすことがある。 ・秋から多くなり、冬から春先に流行し、学齢期の小児や高齢者がかかりやすい	
潜伏期	・1～3日	症状	・普通は1週間で回復するが、肺炎を併発することがある。 ・高齢者が肺炎を併発すると重症になりやすく、死亡することもある
病原体	・インフルエンザウィルス（A型、B型、C型がある）※強い変異性があり、A型は、周期的に大きな抗原変異が起きる		
感染源	・患者や不顕性感染者（病原体保有者）の鼻汁、痰、唾液など		
感染経路	・飛沫感染（患者の分泌物に汚染された器物を介しても感染する）		

麻疹（はしか）（五類）		・1～6歳までの子供が最もかかりやすい。 ・2～3年ごとの周期で流行を繰り返す傾向がある	
潜伏期	・10～14日	症状	・発病後、3～4日で、口中の頬の部分の粘膜に白い斑点（コプリック斑）がでやがて全身に発疹ができる
病原体	・麻疹ウィルス		
感染源	・患者の鼻やのどの分泌物	感染経路	・空気感染、飛沫感染、接触感染で、その感染力は非常に強い
予防対策	・定期の予防接種を受ける		

百日せき（五類）		・5～9月に多く発生する（4～5歳以下の乳幼児が最も高い罹患率を示す）	
潜伏期	・1～2週間	病原体	・百日せき菌
感染源	・患者や保菌者の咽頭や気管粘膜の分泌物による	感染経路	・飛沫感染（分泌物で汚染された物品を介しても感染する）
予防対策	・定期の予防接種を受ける		

風しん（三日はしか）（五類）		・妊婦の罹患で、流産や先天性風しん症候群(心臓病、白内障、聴力障害)の子供が生まれる危険性がある	
潜伏期	・2～3週間	症状	・発疹は顔に多く出るが、体や手足にも出る
病原体	・風しんウィルス	感染源	・患者の鼻や咽頭の分泌物によるにより感染する
予防対策	・定期の予防接種を受ける	感染経路	・飛沫感染（分泌物で汚染された器物を介しても感染する）

【飲食物を介して感染する感染症】

細菌性赤痢（三類）	潜伏期	・1～7日	感染源	・患者および保菌者の大便
	病原体	・赤痢菌	感染経路	・大便に含まれた赤痢菌が手指、食物、水などを介して口腔から入り感染

腸管出血性大腸菌感染症（三類）		・各地で死者がでる集団発生が続いている ・O157のほかO26、O103、O111がある（O157は、毒力の強い『ペロ毒素』をだすのが特徴）	
-----------------	--	---	--

潜伏期	・4～8日	感染源	・汚染された飲食物、井戸水や患者の便
病原体	・ほとんどが腸管出血性大腸菌O157またはO26	感染経路	・飲食物を介しての経口感染
予防対策	・大腸菌は熱に弱く、加熱により死滅する（75℃1分以上の加熱で死滅） ・どの消毒剤でも容易に死滅するため、通常の食中毒対策で十分に予防できる		

A型肝炎（四類）	・わが国では環境衛生、個人衛生の向上により患者の発生は少ない ・B型肝炎、C型肝炎のような持続性感染がなく、慢性肝炎へ移行しない	感染経路	・飲食物による経口感染
----------	---	------	-------------

【血液等を介して感染する感染症】

B型肝炎（五類）	・かつて血清肝炎とよばれていた（輸血によっておこる肝炎） ・ワクチンが開発され、実用化		
潜伏期	・1～6ヶ月	感染源	・B型肝炎ウィルスのキャリアの血液（体液）である
病原体	・B型肝炎ウイルス	感染経路	・感染には、①一過性感染 と、②持続性感染 がある
①一過性感染	・感染経路は、キャリアとの性的交渉と、医療行為（汚染された注射針などで傷を負ったための感染）		
②持続性感染	・大部分がキャリアの母親からの出産時の感染（垂直感染） ・持続感染者の中から肝硬変、肝がんを発症する場合もある		
予防対策	・血液や体液の扱いを衛生的に行う習慣をつける ・キャリアの母親より生まれた新生児にワクチン投与をするなどの母子感染防止対策 ・注射針の取り扱いに注意する ・血液が付着しやすいかみそりなどは、一人ごとに使い捨てるか、使用後適切に消毒する（シザーも含む）		

C型肝炎（五類）	・主な感染経路は、輸血による感染（注射や性行為や傷口から血液や粘膜、皮膚等を通じて感染）
----------	--

後天性免疫不全症候群（エイズ）（五類）	・各種治療薬が開発され、完治は未だにできないが、症状のコントロールは可能となっている ・HIV感染の有無は、感染後6～8週間たてば抗体検査で判定可能		
潜伏期	・数ヶ月から約5年の潜伏期を経て10～30%の人が発病	感染源	・感染者の精液、血液など
病原体	・ヒト免疫不全ウイルス（HIV）	感染経路	・性的接触と血液による汚染
症状	・病気が進行し身体の免疫力が低下してくると、通常は発病しない弱毒性の細菌や真菌による感染症がおこる（日和見感染）		
予防対策	・感染力はきわめて弱く、血液や体液の取り扱いを衛生的にすれば、通常の生活では心配はない		

梅毒（五類）	・2010年（平成22）以降患者数が増加に転じている		
症状	・死亡に至る場合がある	病原体	・梅毒トレポネーマ（細菌）
①後天性梅毒	・生まれたあとに、患者との性交や接吻による直接接触感染によるもの		
②先天性梅毒	・母親が梅毒の場合に胎盤を介して胎児にうつるもの（母子感染）		

【動物・節足動物を介して感染する感染症】

ラッサ熱（一類）	・致死率が高く、伝染力も強い		
病原体	・ラッサ熱ウイルス	感染源	・このウイルスを保有しているネズミと、この病気に感染した患者
		感染経路	・血液や排泄物と接触することにより感染

ペスト（一類）	・抗菌薬による治療が可能であるが、無治療では致死率は高い		
病原体	・ペスト菌	感染源・感染経路	・ペスト菌をもったノミの刺咬（しこう）により感染する場合と、患者の飛沫や感染動物の糞尿などの吸入により感染する場合がある

デング熱（四類）	・2014（平成26）年夏には代々木公園（東京都渋谷区）を発端とした国内流行があった ・地球温暖化や人口増加にともなう都市化を背景に、さらなる流行地の拡大が懸念されている ・ワクチンは開発中である		
潜伏期	・5日	感染源	・病原体を血液に保有する患者と、唾液腺に保有するヤブカが感染源である
病原体	・デングウイルス	感染経路	・患者を吸血したヤブカがデング熱を媒介する（ヒトからヒトには直接感染しない）